

令和3年度学校評価総括表

斑鳩町立斑鳩東小学校

教育目標	自ら学び、仲間と共に 心豊かに たくましく生きる児童の育成			総合評価  B
教育方針	自ら学び、仲間と共に、心豊かに、たくましく生きる児童の育成を目指し、基礎的、基本的な知識・技能・態度を身につけさせるとともに、自ら判断し、仲間と問題をよりよく解決していく「生きる力」を身につけさせる。			
学校経営ビジョン	めざす学校像	めざす教師像	めざす児童像	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域に開かれた、信頼される学校</li> <li>○保護者・地域の声を聞き、学校改善に取り組む学校</li> <li>○学校公開、学校の情報、子どもの様子を発信する学校</li> <li>○保護者・地域の教育力を活用する学校</li> <li>○幼小中及び関係機関と連携した取組を行う学校</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教えるプロとしての指導力を身に付ける。</li> <li>○温かさや厳しさをもって指導する。</li> <li>○子どもと一緒に活動し、感動を大切にす。</li> <li>○明るく、心身の健康に努める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○よく考える子……「確かな学力の育成」</li> <li>○支え合う子……「豊かな人間性の育成」</li> <li>○たくましい子……「たくましい心身の育成」</li> </ul>	
前年度の評価と課題		今年度の重点目標		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度は全国学力学習調査は学校独自での考察になったが、本校の児童の実態として、問題文を最後まで集中して読み続ける力、問題文を筋道に沿って理解する力、問題を的確に把握する力、基礎基本の知識をもとに、問題に応じて活用・応用する力、自分の意見を持ち、伝えるように表現する力に課題があることがわかっている。</li> <li>・家庭学習について、目標数値に近づけることはできたが、学年や個々による差が大きく定着には至っていない。</li> <li>・児童の挨拶や場に応じた言葉遣いがなかなか定着しない。</li> <li>・全体的には、家庭内の生活リズムは安定しているが、習慣的に外遊びをしている児童は固定化されている。</li> </ul>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 「主体的、対話的な深い学び」をめざした授業改善を創造し、本校児童の学力課題である「思考力」「表現力」「読解力」の向上に努める。また、基礎学力の定着を図り、個に応じた指導を工夫しながら、わかる授業の促進を行う。</li> <li>2 多様な違いを認め合い、和の精神のもと思いやりのある、いじめを許さない集団づくりを目指し、道徳教育・人権教育、学年・学級活動の充実を通して、認め合い、支え合い、高め合う集団づくりに努める。また、自主、自律のある学校生活が送れるよう、規範意識や集団意識の向上を図る。</li> <li>3 教職員のICT研修を充実させ、教員がICT機器を活用できるスキルを身につける。</li> <li>4 ホームページ等を通して積極的に情報を発信し、学校としての説明責任を果たすとともに、学校と保護者・地域が連携した教育目標の達成と教育課題の克服に取り組む。</li> </ol>		

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	評価	成果と課題(評価の分析)	課題の改善策等	学校関係者評価
確かな学力の育成	教材研究や授業の工夫・改善を行い、わかる授業に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日々の教材研究を充実させ、学習環境の準備と子どもがわかる授業の指導を行う。</li> <li>○ICTの活用により、わかりやすい授業の創造を図る。</li> <li>●子どもへのアンケート調査「学校の勉強はわかりやすい。」に対してA評価60%以上、A+B肯定評価を90%を目指す。教員アンケートで、A評価90%以上を目指す。</li> </ul>	B	児童アンケートの結果、A評価51%、B評価37%で、A+Bの肯定評価は88%の結果にとどまった。目標値には届かなかったが、昨年度は、A+Bの肯定評価と同等であり一昨年度より改善傾向にある。学習環境の安定で意欲と集中力を高め、ICTの活用や通級指導担当との連携により、個々への配慮にもなり、授業の充実につながったのではないかと考えられる。	まずは、学習規律の徹底を図り、児童が安心して学習に取り組める環境を確立・維持することが大切である。そのことが、児童の集中力にも直結すると考える。また、個々の特性に配慮したユニバーサルデザインの視点や児童が主体的に取り組む題材の設定や学習の展開、ICTを効果的に活用しわかりやすい授業展開を今後も組み立てていく必要がある。	学習参観の際は、離席する児童もなく落ち着いて学習に取り組んでいた。ICTを効果的に活用しているクラスが多く、視覚的に捉えやすかった。教員のスキルアップも大切だが、現状では校務が多く教員の負担が大きい。スキルを上げることよりも少しでもゆとり時間を提供し、わかりにくいと感じている児童に対して個々の分析を行い、
	安心して学べる環境づくりに取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○互いの学び合いを大切にできる落ち着いた学習環境と豊かな人間関係の形成の充実を図る。</li> <li>●学習意欲アンケートの「安心して学べる環境づくり」のそれぞれの項目でA+B肯定評価を80%以上を目指す。</li> </ul>	B	1学期の学校意欲アンケートでは、質問80%、賞賛73%、落ち着いた環境81%、発言73%で平均77%であった。昨年度は、平均78%であったので、目標には届かなかったが落ち着いた学習環境になってきている。コロナ禍の中で学習内容が制限されたこともあり、互いの学び合いが深める環境までには至っていない。	来年度のコロナ感染の状況はわからないが、今年度から研修を深めている、教師主導型から子どもが主体的に活動し互いの学び合いが深まる協同的な学びを発展させていく。	学力の育成の多様化を図る必要がある。学ぶ意欲、思考力、判断力、表現力を含めた幅広い学力を育てることが必要であり、目標を重点とし
	「主体的、対話的で深い学び」の創造をめざし授業改善に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「主体的・対話的な授業を目指して、～協同と探求を学びの基盤として～」の研究主題に取り組む。</li> <li>●子どもへのアンケート調査「授業中、進んで発表する。」のA評価を40%以上、A+B肯定評価を70%以上を目指す。</li> </ul>	B	児童アンケートの結果、A評価30%、B評価32%で、A+Bの肯定評価は、62%の結果になった。昨年度が60%、一昨年度が56%であったので、目標値には届かなかったが、少しずつ改善傾向にある。コロナ禍の中、教員が工夫しながら研究主題に迫れるように取り組んでいる成果であるとする。	コロナ禍の中ではあるが、指導教員を招聘し、研究主題に併せて低中高の3つの研究授業に取り組み研究協議を行った。今後も授業研究を深め、教員のスキルアップを進め研究主題に迫っていく必要がある。	学力の育成の多様化を図る必要がある。学ぶ意欲、思考力、判断力、表現力を含めた幅広い学力を育てることが必要であり、目標を重点とし

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	評価	成果と課題(評価の分析)	課題の改善策等	学校関係者評価
	繰り返し学習させることにより、基礎学力の充実と個に応じた指導の工夫を図る。	○基礎学力定着を図るため、学年会議や学力向上委員会で情報交換を行い、各学年の取組に活かす。 ●教員アンケート肯定評価90%を目指す。	A	教員アンケートは、肯定意見が96パーセントと昨年度よりも3ポイントアップし、目標値を超えることができた。一昨年度より上昇傾向にあり、児童に基礎学力定着のため繰り返し学習させることに教員が危機感を持って取り組んだ結果だと思われる。	来年度も基礎学力定着のため、個々の児童の実態を把握しながら、学年会議で情報交換を行い、継続的に取り組めるようにしていく。	ぎてしまうと時間だけが失われ、こなすことが目的になってしまうので注意が必要。自分で学ぶ力を育て、子ども自身が学びたくなる環境を整えることが大切である。
	家庭学習の習慣化と充実をめざす。	○「家庭学習の手引き」を配付し、家庭学習の時間(10分×学年+α)の定着とその内容の充実をめざす。 ●児童アンケート、学習意欲アンケートで、70%以上を目指す。	B	児童アンケートの結果では肯定意見は70%、学習意欲アンケートでは67%の結果になった。平均すると約70%であるが、学年によってはばつきがあり家庭学習の定着には至っていない。	学校全体での家庭学習の手引きを配布し、家庭学習の必要性について啓発を行っているが定着には至っていない。家庭学習について学年や個々による差も大きいので、学年会議等で宿題の量を検討しながら家庭への協力も含め、この数値を高める工夫が必要である。	
		○基礎学力及び学習内容の定着を目的とした、学習課題を毎日提示する。 ●子どもへのアンケート調査「宿題を毎日きちんとしている。」で、A評価を75%以上、A+B肯定評価95%以上を目指す。	B	児童アンケートは、A評価67%、B評価24%、A+Bの肯定評価は、91%の結果になり、昨年度、一昨年度と同等の結果になった。目標値の95%を達成するためには、宿題ができない課題を抱えている児童に視点をあて、家庭学習を定着させる必要がある。	課題を抱えている児童への声掛けやサポートをしていくことで目標値達成につなげる。今後も継続して基礎学力定着のために日々のドリル学習等を進めたり、個々に応じた宿題を提示したりして、児童が達成感を味わい学習意欲が高まるようにする。	
豊かな人間性の育成	自ら進んで元気よくあいさつをする子どもの育成に取り組む。	○定期的なあいさつ運動や各学級での啓発を促進し、一人一人への意識付けをはかる。 ○学級活動や道徳の時間を活用して、あいさつについて考えさせる。 ●児童・保護者・教員アンケート結果で、肯定的な回答 80%以上を目指す。	B	教員の自己申告シートでも、挨拶のできる児童の育成を目標に掲げている教員も多く見られ、学校全体の課題として捉えている。児童アンケートの結果では、A+Bの肯定意見が72%で昨年度と同等で目標値にはほど遠い。保護者アンケートでは、肯定意見では92%みられたが、登下校中のボランティアや地域の方への挨拶が見られないとの意見もある。	挨拶のできる児童の育成を目指し、学校全体の課題として今後も取り組んでいく。また、教員だけでなく、保護者にも協力を求め取り組んでいきたい。目標を達成できる方策を生徒指導部と相談しながら進めていく。	挨拶や丁寧な言葉遣いのできる児童を育てるには、落ち着いた学校生活の中で相手を尊重する心を培っていくことが必要。「挨拶をしない。」の声掛けだけでは児童の心は育たない。豊かな人間性の育成のため、学校の教育は必要と考えられるが、言葉遣いや相手を思いやる気持ちを育む教育については、保護者の協力も重要である。
	「場」に応じた丁寧な言葉遣いができる。	○学校の教育活動全般を通して、「場」に応じた言葉遣いについて考えとともに、道徳の時間を活用し、丁寧な言葉遣いについて考えさせる。 ●児童・教員アンケート結果で、A+B肯定評価を80%以上を目指す。	B	児童アンケートの結果、肯定意見は昨年度一昨年度より、4ポイント増の76%の結果になった。まだまだ個々の指導の徹底ができていない。できていない児童には、配慮が必要な児童と重なるところもあるので、その対応への研究も必要である。	日頃の学習指導や道徳の時間を活用し根気よく指導していく必要がある。大人である教員が模範を身に着けていく必要があるので、教員の意識も高めていく。	
	ちがいを認め合い、いじめを許さない集団づくりを進め、思いやりの心を育てる	○教育活動全体を通して、互いの人権を尊重し、互いを思いやる意識を育てる。 ●学校児童及びいじめに関するアンケート等で、「友だちと協力して仲良く過ごしている」「仲良しの友達がいる」と回答する児童90%以上を目指す。	B	日々の教育活動全体を通して、なかまとの繋がりがりや、違いを認め合う集団づくりについて、様々な角度から指導をしてきた。児童アンケートでは、「友だちと協力して仲良く過ごしている」の肯定意見が昨年度と同等の93%ではあるが、11月のいじめアンケートでは、軽微な事象を含めると嫌な思いをしたことがある児童は、たくさんいる。	日頃の学習活動や道徳の時間を使って、いじめは悪であるという意識を徹底させることはもちろんであるが、日々の些細な相手を傷つける言動から、根気強く指導をしていく。	
	自主、自律のある学校生活の育成を図る。	○規範意識の向上を図るとともに、集団の一員として、自ら考え行動する意識を育てる。 ●教員、児童アンケート肯定評価85%を目指す。	B	児童アンケート「学校や学級の約束を守っている」では、肯定意見は87%で昨年度よりも4ポイント、一昨年度より3ポイント増加している。目標値は達しているが、90%以上を目指す。	日頃の小さな荒れを見逃さず、全職員で声掛けをして指導していくことを、教職員が共通認識を持ち、根気よく指導を行っていく。	
たくましい心身の育成	体力向上に向けた体育の授業改善に取り組む。	○体力向上プランをもとに、児童のウイークポイントを改善するために、体育の指導に、意図的・計画的な活動を取り入れる。 ●教員アンケート肯定評価80%以上を目指す。	B	昨年度は、コロナ禍の影響もあり、体育での活動も制限され、体力向上に向けた取組がほとんどできなかったが、今年は感染状況をふまえながら、工夫して体力向上に向けた取組を進めている。職員アンケートでも昨年度より8%増の66%となったが、まだまだ目標値には届かない。	コロナの状況にもよるが、体育部が中心となり体力向上プランに沿った各学級での体育授業の進め方を検討し提案をしよう。また、県が進める外遊びチャレンジにも積極的に参加をしていく。	進んで運動をしない児童が17%いる。友達との関わり方を学ぶためにも、学校で外遊びの機会を設定すべき時代になっている。体力の低下が懸念されている中で、子どもたちにたくましい心身の育成を十分理解してもらおうと共に、自ら行動できる環境を整えることが大切である。また校内での怪我を防ぐためにも行動制限をかけることも大切だが、なぜ制限がかかるのか十分に説明し理解することで、自ら自分の身を守る行動をとれるようになる。
	外遊びや学級活動を通して、運動に親しませる。	○外遊びを推奨し、体育や休み時間の中で、運動時間の確保を図る。 ●児童アンケートで「体育・休み時間などに外遊びに出る児童90%以上を目指す。	B	児童アンケートでのA+Bの肯定意見は、83%で昨年度より5ポイント減、一昨年度よりは2ポイント増の状況である。コロナ禍の中で運動不足であったことも影響しているかもしれないが、外遊びを推奨し目標値の90%を目指したい。	今後も運動の楽しさを味わえる遊びや学級全体で楽しめる遊びを紹介しながら、休み時間の外遊びを活性化させる。	
	「早寝・早起き・朝ご飯」等の健康的な生活習慣を身に着ける。	○保健や学級指導を通して健康教育の充実を図り、個々の意識の醸成に取り組む。また、学校だよりや保健だより等を通じ、家庭へ呼びかける。 ●児童、保護者、教員アンケートで95%以上を目指す。	B	6年生の全国学力・学習状況調査の質問紙では、朝食95%、一定時間の就寝79%、起床85%となった。朝食や一定時刻の就寝の割合は、全国や奈良県と同等か少し高くなっているが、一定時刻の起床の割合は、全国、奈良県より低い。生活習慣を見直し、規則正しく起床できる習慣を身に付けさせる必要がある。	引き続き、学校だよりや保健だよりを活用しながら、保護者への啓発活動を進めていく。また、保健や学級活動の時間を使いながら、規則正しい生活習慣について理解させていく。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	評価		成果と課題(評価の分析)	課題の改善策等	学校関係者評価
	安全、安心の学校づくりに取り組む。	○教室等の日々の安全点検や月1回の施設確認を行い、点検内容の情報を共有することで、事故を未然に防ぐ指導を行う。 ●健康上・身体上の配慮を要する児童の把握と当該児童への適切な対応を図り、事故・ヒヤリハット「0」とする。	B	B	日頃の安全点検や生活指導、安全管理により、大きな事故につながる事象は起きなかった。しかし、休み時間に転倒による怪我で病院へ行くケースがまだ多くある。また、食物アレルギーによるアナフィラキシーへの対応についても注意を払っている。	日々の安全管理や児童への指導を継続して行い、事故の未然防止に努める。教職員に安全管理マニュアルを常に意識させておく。児童の転倒による怪我を防ぐために、体作りなどあらゆる角度から防止を図る。アレルギー対応については、職員研修を行い、起きた後の対応についても共通理解を図る。	
	配慮を要する児童(通級在籍児童も含む)に対して、個々の実態に応じた適切な支援を行う。	○職員間での児童理解に努め、特化したケースについては、ケース会議等で理解・支援の検討を行う。 ○個々の支援について校内で全体研修を実施。 ●教員アンケート「個々の実態に応じた指導・支援が行えた。」結果で、肯定的な回答95%以上を目指す。	A	A	教員アンケートでは、肯定評価100%となり、教員全員が個々の実態に応じた指導・支援を行っている」と回答している。個々の実態に合わせて特支COが中心となり、ケース会議を開き配慮を要する児童への支援の在り方を検討し共通理解を図った。職員全体で課題を抱えた児童の情報を共有する場を設定し全職員で見守っていく体制ができています。	今後も特支COや通級指導担当教員が中心となり、配慮を要する児童の支援の在り方をケース会議や校内研修を通して共通理解を図る。また、具体的な支援の方法について、校内研修を実施し、個々の支援のスキル向上を図る。	通級指導は、配慮を要する児童の学力保障に加えて、心のケアをしたり自尊感情を育てたりする時間になっており、個々の特性に応じた指導がなされることを願う。個々の実態に合わせてケース会議を開き、教職員全体で情報共有しながら児童に向き合う姿勢は素晴らしい。苦手を克服するだけでなく、児童の得意などを増やして上げて欲しい。
特別支援教育	学びの連続性の実現に向けた校内支援体制の充実を図る。	○通級指導教室の活用を図り、通級担当教諭や特別支援COと連携し、配慮を要する児童の校内支援体制の充実を行う。 ○保護者・関係機関との連携、活用を図る。 ●教員アンケート「保護者や関係機関と連携して、個に応じた指導・支援を行う。」の結果で、肯定的な回答90%以上を目指す。	B	B	教員アンケートでは、肯定評価82%と目標値には届かなかったが、通級指導教員担当やSCと連携しながら、担当が個々の支援について相談したりケース会議を開催し学校全体で共通理解を図ったりしている。	今後も通級指導教室やSCとの連携により、配慮を要する児童の個々の支援を充実させ、そのノウハウを共有し合い学校全体の取組に発展させる。また、ケースによっては特支COが中心となり保護者と相談しながら関係機関と連携し支援にあたる。	
	教員の授業力の向上を図る。	○研修部を中心に、授業研究やICT活用研修を行い、教員一人一人の授業力、ICT活用能力の向上を図る。 ●ロイノート活用等のICT研修を実施する。	A	A	コロナ禍の中、講師を招聘し全体研修および授業研究を進めることができた。ロイノートを活用した授業研究やICT研修を実施し力量を高めた。職員がタブレット端末を活用する授業が多くなり、児童のICT活用能力向上につながっている。	今後も研究授業を進め、個々の教員の授業力向上に努める。教員のICT活用能力を身に付けるため研修に継続して取り組む。	学習指導や生徒指導、先生の仕事はますます煩雑化している。ICTの活用能力を伸ばすことも大切だが、児童や保護者は先生の豊かな人間性(信頼できる先生)を求めている。働き方改革を徹底し、教員が児童にゆとりを持って関われるようにしていく必要性がある。
教員の育成	児童一人一人の理解に努め、個に応じた指導と支援に努める。	○「こころと生活等に関するアンケート」も活用しながら、児童の実態把握に努め、日々の声掛けや相談に応じる。 ○一人で抱え込むことなく、学年、学校としてチームで関わり、改善を目指す。 ●保護者・児童・アンケートで肯定評価90%を目指す。	B	B	肯定評価は児童アンケート89%、保護者アンケート87%と目標の90%に近づいているが、保護者の中には、あまり当てはまらないと否定的な評価も13%いるのは事実である。児童の悩みやトラブルに対して保護者に安心して納得してもらえるように、今後も児童保護者に寄り添いながら丁寧に対応していくことが求められる。	働き方改革を進めながら、教員が児童とゆとりをもって関われるようにしていく必要がある。児童のつぶやきや行動の変化、友達関係にアンテナを張り、児童観察を進めていく。保護者の相談に傾聴を心がけ寄り添いながら問題解決を進める。問題が起きたときに、教員一人に対応するのではなく「報連相」を大事にチームとして対応できるように今後も学校全体で取り組んでいく。	
特色ある取組	児童が生き生き活動する学校行事、集会活動等に取り組む。	○魅力ある学校づくりの視点に立ち、児童の主体性を生かした学校行事や集会活動等を、コロナ感染対策を行いながら実施する。 ●アンケート結果の肯定評価を児童、保護者80%、教員80%以上を目指す。	B	B	保護者アンケートでは、A+Bの肯定評価が91%と、昨年度、一昨年度と同じぐらいの結果であった。本年度もコロナ禍で活動が制限されたが、感染対策を行いながら限られた行事や児童活動を進めている。コロナ禍の中でも対策をしながら取り組んだ結果の評価と考えられる。	今後もコロナ感染に留意しながらの学校行事や集会活動になると予想されるが、感染予防をしっかりと行った上で、児童が生き生きとする行事や活動に取り組んでいく。	学校の行事は楽しいと感じている児童が多い。コロナ感染対策を徹底しながら、行事や活動に取り組んでほしい。
保護者・地域との連携	家庭・地域と連携し、子どもの成長や教育課題に向け、協力して取り組む。	○学校、学年、学級だより、HP等で、学校の方針や活動の様子を伝える。 ○地域や保護者と連携し、学校のさまざまな課題に取り組む。 ●保護者・教員アンケート「学校公開、HP、学校・学年・学級通信で学校の様子を伝える。」結果で、肯定的な回答 90%以上を目指す。	C	C	保護者アンケートでは、A+Bの肯定評価が80%と昨年度より8%減少し、目標値の90%以上にはほど遠い。教員アンケートでは89%となっているが、保護者との意識にずれがある。日々の業務でHPや学年だより等に余裕がないのが現実で、運営を見直す必要もある。	今後も学校行事等の取組や学校の方針を学校だよりHP等を通して発信を行っていく。今年度も、コロナ禍の中、学校公開等で保護者や地域の方に学校の様子を観てもらえることが少なかったが、コロナの感染の状況も観ながら感染対策を行った上で、開かれた学校づくりを進めていく。	地域的に学校に協力的な保護者や地域の方が多く、学校、保護者、地域とのつながりを大切に「共教」という視点を持って発信して行く必要がある。
業務の改善	業務の改善を図り、勤務時間縮小に取り組む。	○会議の方法や業務内容の見直しを行い、効率的な事務処理や業務を行えるよう工夫する。 ○勤務時間の現状を把握しながら、勤務時間の削減に向けて努力する。 ●勤務時間終了後の、超過勤務時間を月45時間以内になるよう努力する。	B	B	超過勤務時間を縮小しようとする職員間の意識改革は進んでいる。会議の内容を精選したり簡素化したりして、個人の仕事に向き合う時間を確保するようにしているが、超過勤務の時間の減少には至っていない。繁忙期も含めて今後さらに超過勤務時間が減少できるように業務改善を行っていく必要がある。	校務支援システムが導入され、本年度は理解するのに時間がかかったが、今後、校務の軽減になるように進める。また、学校行事等の見直しも含め精選できる機会でもあるので検討を進めていく。	コロナ禍で、消毒、欠席児童への連絡、授業のオンライン発信など、先生はより多忙になっている。先生の心身の健康が豊かな指導につながるの、思い切った行事の精選等に取り組む必要がある。